

京大広報

No. 478

京都大学広報委員会



新年名刺交換会 —関連記事本文890ページ—

目次

新年を迎えて	総長 井村 裕夫…889	<栄誉>	
<大学の動き>		井村裕夫総長が日本学士院会員に選ばれる……………894	
京都大学創立百周年記念シンボルマーク……………890		—京都大学の百年（第5回）—	
新年名刺交換会……………890		荒木寅三郎総長の宣誓式告辞……………895	
自衛消防団員に感謝状贈呈……………890		<保健コーナー>	
部局長の交替等……………890		体重の変動と健康……………896	
外国人教員及び留学生と本学関係者等との懇親会…891		計報……………897	
平成7年度国立学校特別会計予算内示の概要…………891		日誌……………897	
寄附講座「分子免疫学・アレルギー学		<随想>	
講座」の設置……………892		ロシアで考えたこと 名誉教授 勝田吉太郎…898	
京都大学市民講座「ながれ		<コラム>	
講演要旨（その1）……………892		病理解剖と医療	杉山 武敏…899

新 年 を 迎 え て

総 長 井 村 裕 夫

明けましておめでとうございます。平成7年の新年にあたり、年頭の御挨拶とともに、所感の一端を述べさせていただきます。

平成6年の我が国は、リストラクチャリングの波に揺れた年でありました。第二次世界大戦後の我が国の発展を支えてきた政治、経済、教育などすべてが行き詰まりを見せ、重大な転換期を迎えた年であったと言えます。政界では思いもよらぬ再編成が行われましたが、政治の混迷は一層深まったように思われます。リエンジニアリングの名のもとに進められている経済改革も、まだ出口が見えない状態であります。しかし規制緩和が徐々に進み、価格破壊という新語も飛び出したように、我が国の社会も少しづつ変わりつつあります。戦後50年目を迎える平成7年こそ、新しい我が国の体制が生まれる最初の年、明るい未来に向けて歩み始める年となってほしいと願っています。

昨年私は高等教育あるいは科学技術に関連した4つの国際シンポジウムに出席する機会を得ました。その中で共通して感じたことは、世界の大学が今大きい変革の時代にさしかかっているということであり、大学を取りまく環境の顕著な変化の中で、大学はもはや象牙の塔ではあり得ないことがどの国においても明らかになって参りました。大学の多様化の流れの中で、それぞれの大学が個性を発揮しながら、熾烈な生き残りのための競争を戦わねばならなくなってきたと言えるで参りましょう。

加えて新しい情報システムの発達が、大学教育を大きく変えることが予想されます。アメリカではゴア副大統領が主導する情報スーパー・ハイウェイ構想の中で、国立研究教育ネットワークの整備が進められています。京都大学におきましても、京阪奈学研都市における新世代通信技術開発の一環として本学附属病院と大阪大学附属病院を結んだハイビジョンを用いる新情報システムを利用して、本年3月から試験的に講義の交換、病理組織診断などを始めることになりました。この試みが成功すれば、大学教育に革命的とも言える大きい影響を及ぼすことは必至であり参りましょう。

京都大学は我が国を代表する Center of Excellence になるべく、今後とも一層努力を続けねばなりません。研究面では、国際的な厳しい評価に耐え得る創造的な研究を生み出して行く必要があります。また教育の面では、自ら問題を発掘し、自ら考えることのできる人材を育成するべく、教育改革を実施しなければなりません。幸いにして昨年は全学共同利用の高等教育教授システム開発センターが設置され、大学教授法の研究がスタートしました。年末に内定した明年度予算では、教育評価にかかわる第二部門の設置が認められました。このセンターは本学における教育の質を高めるのみでなく、教育に注ぐ教官の努力と成果を正当に評価するため、重要な役割を発揮するものと期待しています。

昨年京都大学では将来構想をまとめ、大学院の重点化のみでなく、独立研究科の設置についても検討を始めました。また研究の幅を拓げるため寄附講座の導入も一定の枠の中で進めることとなり、既に2講座が決定しました。研究機能の充実、京都大学にとって極めて重要であり、その充実のため一層努力していく必要があります。

Center of Excellence とは単に秀れた研究を生み出すだけでなく、明日の社会を担う創造性に富んだ人材を育成するところでもあります。既に述べたように教育と研究のバランスのとれた発展が必要である所以であります。

平成7年は、京都大学創立百周年に、後2年と迫った年であります。経済不況のため遅れていた百周年記念事業をいよいよ始動しなければなりません。文部省の認可も近く得られる予定であり、実行委員会の見通しもたちました。リエンジニアリングに揺れる財界に寄附をお願いしなければならず、逆風についての記念事業の出発とならざるを得ません。そのため私は個人の募金にも力を入れたいと考えています。

昨春秋、私はアメリカのブラウン大学を訪問しましたが、たまたま Parent's Day であり、多くの学生の父兄が集まっていました。私立大学であるブラウン大学の経営は必ずしも容易でないようですが、父兄が大学財政に少しでも貢献したいという熱意を持っていることに深い感銘を受けました。その時感じたことは、教育こそは皆で支えて行くべきものであるという考え方が強いことでした。今後我が国でもこうした考え方を広げて行かないと、文化の幅広い向上は望めないのではないかと考えています。

現在のような状況の中での記念事業は容易なことではありませんが、構成員の皆様の御協力を得てこの記念事業を成功させるべく全力を盡すつもりでありますので、どうか宜しくお願い致します。

平成7年という年が、京都大学にとりましても、また皆様にとりましても良い年でありますよう祈念して、私の挨拶とさせていただきます。

<大学の動き>

京都大学創立百周年記念シンボルマーク

本学が平成9(1997)年に創立100周年を迎えるのを記念してシンボルマークの図案を公募したところ、49点の作品の応募があった。

京都大学創立百周年記念事業委員会幹事会小委員会において審査が行われた結果、木質科学研究所 本田綾子さんの考案による次の図案が最優秀作品として選ばれ、同幹事会においてこれを創立百周年記念シンボルマークとすることに決定した。

これは創立100周年の「100」の数字を図案化したもので「1」は100年の土台を表わし、その上の「0」は2つの年輪を表わしている。

今後は、このシンボルマークを、創立百周年記念事業に関する印刷物などに広く使用することとしている。



新年名刺交換会

本学恒例の新年名刺交換会が、1月4日(水)午前10時から京大会館において、井村裕夫総長をはじめ、奥田 東、沢田敏男、岡本道雄元総長、西島安則前総長、名誉教授、教職員約200名の出席を得て行われた。

はじめに井村総長から新年の挨拶があり、次いで奥田 東元総長の発声による乾杯ののち歓談、午前10時45分散会した。

自衛消防団員に感謝状贈呈

12月9日(金)午後3時から、事務局長室において、自衛消防団員に対して、総長からの感謝状及び記念品が加藤事務局長から贈呈された。

この日感謝状を受けた団員は、岡島 徹(庶務部)、家迫 榮(施設部)の各氏である。

なお、当日午後2時30分から、自衛消防団による演習が行われ、日頃の訓練成果が披露された。



部局長の交替等

農学部附属農場長

草薙得一農学部附属農場長の任期満了に伴い、

その後任として矢澤 進農学部教授（蔬菜花卉園芸学講座担当）が1月1日農学部附属農場長に任命された。任期は平成8年12月31日までである。

外国人教員及び留学生と 本学関係者等との懇親会

平成6年度の「外国人教員及び留学生と本学関係者等との懇親会」が12月14日（水）午後6時から、都ホテルにおいて外国人教員、留学生、教職員及び招待者等計約1,000人が出席して開催された。

懇親会は、はじめに井村総長の挨拶があり、続いて瀬地山学生部長の発声による乾杯で始められた。

午後7時頃からのアトラクションでは、インド



ネシア留学生による民族楽器演奏と舞踊、バンガラディシュ留学生による母国の歌、数か国の留学生コーラスグループによるクリスマスソングの歌唱が行われ、更に、大学のサークル団体である奇術研究会による奇術が披露され、盛況のうちに午後8時過ぎ閉会した。（学生部）

平成7年度国立学校特別会計予算内示（本学関係）の概要

平成7年度国立学校特別会計予算が内示された。本学関係の主な事項の概要は次のとおりである。なお、主な内容は予算成立後、本紙部局紹介等の記事により紹介する予定である。

事 項	備 考
理学研究科 専攻の整備	大学院重点化 物理学・生物学関係7専攻の大学院重点化 41講座 → 20(大)講座 修士課程 92人 → 164人 博士課程 54人 → 81人
医学研究科 専攻の整備	大学院重点化 外科系専攻ほか1専攻の大学院重点化 18講座 → 5(大)講座 博士課程 37人 → 52人
工学研究科 専攻の整備	大学院重点化 電気・情報系6専攻の大学院重点化 5学科 → 2学科 39講座 → 26(大)講座 修士課程 111人 → 142人 博士課程 52人 → 66人
農学研究科 専攻の整備	大学院重点化 林学専攻ほか7専攻の大学院重点化 10学科 → 3学科 17講座 → 9(大)講座 修士課程 39人 → 71人 博士課程 20人 → 33人

事 項	備 考
文 学 部 学 科 の 改 組	4 学科 → 1 学科 44 講座 → 16 (大) 講座 入学定員 220 人 → 220 人
臨 時 増 募 の 廃 止	入学定員 △20 人 (工学部△10人 農学部△10人)
(工) 環境質制御研究センターの新設 (時限10年)	環境微量汚染制御実験施設の廃止転換
生 態 学 研 究 セ ン タ ー の 整 備	生態複合研究部門の設置
高等教育教授システム開発センターの整備	大学教育評価システム分野
食 糧 科 学 研 究 所 の 改 組	7 部門 1 外国人客員部門 → 3 (大) 部門
原 子 炉 実 験 所 の 改 組	16 部門 2 施設 → 6 (大) 部門 2 施設
数理解析研究所 応用数理研究部門(外国人客員)の増設 (時限10年)	

寄附講座「分子免疫学・ アレルギー学講座」の設置

平成7年4月1日、大学院医学研究科に寄附講座「分子免疫学・アレルギー学講座」が設置されることになった。

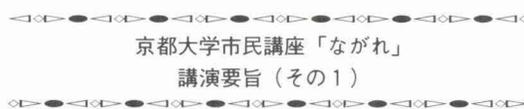
概要は次のとおりである。

1. 部 局 名 大学院医学研究科
2. 名 称 分子免疫学・アレルギー学講座
3. 寄 附 者 バイエル薬品株式会社
代表取締役 ランベルト・クント
4. 寄附金額 総額250,000,000円 (分割納付)
5. 設置期間 平成7年4月～平成12年3月
(5年間)
6. 担当教員
教授相当 武田 俊一
助手相当 園田英一朗
7. 研究目的
免疫システムの仕組みを分子レベルで明らかにし、免疫アレルギー疾患の診断治療に役立てることを目的とする。
8. 研究内容
免疫現象とその異常を、様々な遺伝子ノックアウトマウスの作成、それらのかけ合わせ等を

駆使して、遺伝学的に解析する。

9. 研究課題

- (1) 抗体レパトリーの多様化に関わる分子機構の研究
- (2) 免疫システムの構成要素の解析
- (3) 免疫異常モデルマウスの作成



血液の健やかなながれを保つために

医学部教授 篠山 重威

ヒトの身体は血液によって酸素が組織に運ばれることにより機能する。動脈硬化症や血管平滑筋の攣縮れんしゆくによってこの血液の流れが妨げられると、末梢組織の酸素の需要と血液による酸素の供給のバランスがくずれ、重大な機能障害が生じる。動脈硬化症によって血液の流れが完全に遮断されると下部の組織が死滅することすらある。血液の流れの原動力は心臓のポンプ作用にある。心臓も筋肉から成る臓器であって、冠動脈という血管を流れる血液によって栄養を受けている。冠動脈の血液の流れが障害されて、心臓が正常に機能出来な

くなる病気が心筋梗塞である。

心筋梗塞の危険因子として次の3つを取り上げたい。1) 高血圧、2) 高脂血症、3) 喫煙、である。160/95 mmHg 以上の高血圧が続けば、冠動脈疾患は3倍に、脳卒中は7倍に、心不全は4～7倍に、末梢動脈疾患は3倍に増える危険性がある。高血圧は加齢と共に増加するので高齢化社会になればなるほど危険因子としての重要性が加わることになる。今から20年前に、日本国内、ハワイ、そしてロスアンジェルスで生活している日本人の食物と心筋梗塞発症率の比較がなされたことがある。米国では、総カロリーの内、脂肪が占める率が大きく、それに伴って虚血性心疾患の発生率も高いことが示された。現在でも心筋梗塞の発生率は、日本では欧米に比べてはるかに少ない。それでもその差は狭まりつつある。ハンバーガーやフライドチキン等アメリカの食品が日本で人気を集め、アメリカではすし屋が大流行りをしている現象を考えたい。喫煙は65才以下の全ての男女の冠動脈疾患による死亡の25%に、45才以下の男性の死亡の80%に関係する。我が国の成人男子の喫煙者は60%に及ぶ。最近、自分が直接タバコをすわなくても、近くに喫煙者がいると、それだけでタバコの害が加わるという受動的喫煙が問題にされている。より健康な社会を求めて、まだ為すべき多くのことがあるように思う。

(平成6年10月22日講演)

おカネのながれ

経済学部教授 古川 顯

おカネはしばしば経済の血液にたとえられる。血液が人間の体内を休むことなく循環しているように、おカネは経済の中を絶えず駆けめぐっている。また人は血液がなくては生きられないように、現在ではおカネのない生活を考えることもむずかしい。私たちの体内をながれる血液が多すぎても少なすぎても問題があるように、おカネのながれが多すぎると物価や地価が高騰するし、少なすぎると景気が悪化し、ときには会社が倒産したり、給料やボーナスが減るといった事態が生じる。

第1次世界大戦直後のドイツでは、7年間に物価が1兆倍、100兆マルクのお札が発行されるというすさまじさであった。床屋さんでは、お客が持ってきた卵4個と交換で散髪をし、卵2個と引き換えに髭を剃ったという話、レストランでは、入ったときの値段と出るときの値段が倍ほども違ったといった類の本当の話がいくらでも転がっている。この有名なドイツのインフレーションも、膨大なおカネが出回った結果生じたものである。これほど極端ではないが、我が国においても、おカネの膨張がインフレをもたらした事態をわれわれは何度も経験している。ケインズは「社会の存在基盤を危うくさせるうえで、通貨を墮落させること以上に巧妙で確実な手段はない」と述べているが、まさに至言である。

逆に、おカネのながれが少なすぎ経済活動に好ましくない影響を及ぼすといった事例にも事欠かない。近年、我が国の金融機関はバブル崩壊の結果、不良債権を山ほど抱えるという状況に直面しているが、そのことが金融機関の貸し出し態度を慎重にさせ、おカネのながれが滞ることによって、今回の不況を予想以上に長引かせているようである。

血液のながれが私たちの健康と密接に結び付いているように、おカネのながれも経済活動の健康状態を良くも悪くもする。したがって、一国のおカネのながれを適切にコントロールすることはきわめて重要な経済政策であり、そうした政策を金融政策と呼んでいる。金融の技術革新、金融の自由化や国際化など、最近のおカネをめぐる著しい環境の変化は、我が国の金融政策の舵取を従来以上に難しくしているように思われる。

(平成6年10月22日講演)

時のながれ、歴史のながれ

文学部教授 大山 喬平

時のながれを読みとるのが歴史を認識する第一歩である。しかし時のながれを読みとることが、どんなにむずかしいことに属するかは少し考えれば明らかであろう。第一、歴史をどんなに研究しても、わたしたちのこの世の中が、いったいどこ

へ行きつこうとしているか、行く先になにがあるのか、おおよそのことさえたいいの人には見当もつかない。

フランスの歴史家フェルナン・ブローデルは歴史にみる時のながれには、幾世紀もかかってゆっくりと変化する緩慢ながれ、ほとんど動かず、あるいはゆっくりとしかながれない時のながれ（長期持続）、ほぼ十年周期の変動にさらされる大小さまざまな人間集団の盛衰にかかわるようなながれ（中期持続）、個人の次元でめまぐるしく動く、水面のざわめきにも似た事件史・政治史のごき（短期持続）などがあるとして、それらのながれの相互の緊張と相克のうちに歴史を認識しようとした。

歴史学の歴史をふりかえると、最初の歴史認識は事件史・政治史としてはじまる。近代日本の史学史をふりかえてみても、たとえばわたしが専門にする日本中世史でいうと、久米邦武にはじまり、田中義成につづく日本近代の正統史学として

の実証史学は東京大学に芽生えたが、それは政治史研究であり、両者それぞれの同名の著述である二つの『南北朝時代史』にみるように、それは事件史であって、戦後の佐藤進一の学問の性格にまでそれがある種の刻印を与えつづけている。すこし遅れて、1907年に発足した京都大学の歴史学は文科大学初代の教授である原 勝郎『日本中世史』、内田銀蔵『日本近世史』の二名著に象徴されるように歴史を個人や事件のレベルにとどまらず、もっと広い視野から、時のながれの大局を把握しようとしていた。このながれは大正時代・昭和初期の文化史のながれにひきつがれていき、東京とはことなる歴史学のながれが京都を特徴づけていた。もちろん個人個人の個性もあるが、時のながれを捉えようとする歴史の学問そのものにも、東と西の区別をふくめてさまざまなながれが認められる。

（平成6年10月29日講演）

<栄誉>

井村裕夫総長が日本学士院会員に 選ばれる



このたび、井村裕夫総長が日本学士院会員に選ばれた。

以下に、総長の略歴、研究業績を紹介する。

井村裕夫総長は滋賀県の出身で、昭和29年京都大学医学部を卒業、同37年本学医学部附属病院助手、同40年医学部講師、同46年神戸大学医学部教授、同52年本学医学部教授、平成元年医学部長を経て同3年12月総長に就任した。

井村総長の研究業績は、内分泌学に関するものである。内分泌学は今世紀初頭に始まり、下垂体、甲状腺、副腎、性腺などの古典的な内分泌腺の調節機構とその異常を研究する分野として確立された。しかし今世紀後半に入って内分泌学は、新たにいくつかの境界領域を開拓し、めざましく発展した。その一つが脳と内分泌系の相互関係を研究する神経内分泌学である。とくに脳の産生す

るホルモンないし神経ペプチドと総称される物質の解明は、“心”と“体”の関係を解明する鍵として注目されるようになった。更に膀胱や消化管が神経ペプチドと同じホルモンを産生することが知られるようになり、膀胱・消化管ホルモンの研究もめざましく進歩した。また心血管系やその他の様々な組織がホルモンを産生することも明らかとなり、それらの領域は内分泌学の枠を越えて医学の諸分野へ発展しつつある。

井村総長は下垂体ホルモンの一つである副腎皮質刺激ホルモン（ACTH）の研究より出発し、ACTH と関係の深いオピオイドペプチドの研究、その他の神経ペプチドの神経内分泌領域における意義、免疫系と神経内分泌の相互作用等に関する神経内分泌学の基礎的研究で先駆的業績を挙げた。また、これらの成果を臨床神経内分泌学に応用し、視床下部・下垂体疾患の診断法の確立、新しい神経内分泌疾患の発見に著しい業績を達成した。更に、心血管ホルモン、膀胱消化管ホルモン、腫瘍内分泌学、ホルモン受容体異常症など内分泌学の新しい領域の開拓にあたり、国際的指導者として先駆的役割を果たした。

—京都大学の百年（第5回）—

荒木寅三郎総長の宣誓式告辞

平成6年（1994）4月に挙行された京都大学の学部入学式における「総長のことば」（『京大広報』No. 465）で、第22代総長の井村裕夫は入学生に対し、京都大学の特徴をよく知り、独特の学風の中で大いに自分を啓発してほしいと述べ、97年前の明治30年（1897）における最初の学生の宣誓式（入学式）で初代総長木下廣次が述べた訓示の趣旨、つまり自発自得（自ら意欲をもち自分で学ぶ）が京都大学の教育方針であることを再確認した。そして京都大学の学風として法科大学（現在の法学部）における自発自得をめざした教育法に言及したあと、文科大学（現在の文学部）における初期の教授の役割もまた大きかったとし、初代の学長（文学部長）であった狩野亨吉が、学歴や経歴にとらわれず有能な人材を採用したことを高く評価し、その一人でジャーナリスト出身であった東洋史学の内藤虎次郎（湖南）の在野精神、旺盛な好奇心、そして独創性が京都大学の学風そのものであると力説した。

井村と同じく医学部教授から総長となった第16代の平澤 興は、『京大史記』（1988年）の巻頭言「京大の創立九十周年に想う」と、早石 修らとの座談会「医学を語る」の冒頭の双方で、大正9年（1920）に入学した時に荒木寅三郎総長が述べた式辞に、まるで電気に打たれたように感動し、氏の生涯のうちで、あれほど感動した講演はなく、その時の言葉はいまだに頭に残っている、と述懐している。かつては宣誓式とよばれた入学式の告辞は、感受性ゆたかな青年たちに新鮮な感動を与えがちであったろうが、それにしても平澤の表現はオーバーではないか、と思われるかもしれない。しかし当時の史料に照らしてみると、荒木の宣誓式告辞は京大人のみならず、世間的にも注目の的だったらしいのである。

いわゆる澤柳事件の一年あまり後の大正4年（1915）6月に、医科大学学長（医学部長）を12年間務めていた荒木寅三郎が総長に就任した経緯については、当時の西洋史学の教授坂口 昂の『鉄史斎日記』を駆使した松尾尊兌「沢柳事件始末」（『京都橘女子大学研究紀要』第21号、1994年）に譲るとして、荒木は昭和4年（1929）3月に新城新蔵に交代するまで、14年もの長期間にわたって総長職に在任したあと、更に学習院長を8年も務め、昭和17年（1942）1月に枢密顧問官のまま77歳の全生涯を閉じる。荒木の逝去直後に企画された知友門下生による詳細な伝記の刊行は、15年後に古武彌四郎著『荒木寅三郎』（伝記刊行鳳会、1957年11月）として陽の目をみ、その前後に富田雅次「鳳岡荒木寅三郎先生」が『東京医事新誌』（1957年5月—58年7月）に11回にわたって連載された。鳳岡は荒木の雅号である。両伝記ともに、荒木の宣誓式告辞について特筆し、例えば大正6年（1917）9月の告辞の全文が『大阪朝日新聞』に掲載されたばかりか、9月29日の同新聞の社説が「荒木総長の訓示」であったとして、その社説の全文を転載している。荒木自身も、これらの告辞をいかに自負していたかは、新旧総長更迭式における挨拶で「学生諸君。諸君が学生として行うべき事は、歴年の新入学生宣誓式に於て、御話致しました。今更特に申上ぐべき事はありませぬ」と述べていることに明らかであろう。

ところで、創立期の京都大学教授陣の特色を縦横無尽に論じた文章として、もともと『読売新聞』に掲載された明治36年（1903）刊の斬馬剣禅『東西両京の大学』（1988年に講談社学術文庫として再刊）は有名だが、連載が翌年も続いたことは余り知られていない。翌年の1月10日以後に連載された「青山三浦対荒木」の項に若かりし荒木の人物評が数回にわたって掲載された。そのうちの「おでこ馬鹿なし荒木の多才」の条に「彼れに於て尤も多とすべきは、彼れの智識の決して其専門に限られざるにあり。彼れは其専攻学科の医化学に於て既に海内無敵なるの上に、亦歴史、漢詩等に於て、多大の趣味を有せり。殊に彼れの作詩の伎倆の如き、実に近來の逸材と称するに足る」とある。総長時代の十余年、毎年1回か2回、円山公園内の左阿彌楼（清風閣）に狩野直喜・内藤虎次郎・鈴木虎雄・長尾雨山といった錚々たる詩友を招いて雅会を開き、詩の応酬を行った荒木の詩人としての評価については、没後に書かれた鈴木虎雄「鳳岡先生の漢詩文について」（前掲『荒木寅三郎』所収）に詳しい。

昭和5年（1930）11月に荒木前総長記念事業会から二冊の本が刊行された。13回分の宣誓式告辞の全

文を収載した洋装本の『勸学語』と、線装本の漢詩文集『鳳岡存稿』である。座談の折にしばしば王安石の万言書を激賞していたというだけあって、『勸学語』所収の告辞は何れも理路整然として論旨明晰であり、狩野・内藤・鈴木の序を冠した『鳳岡存稿』には、鈴木を示した韻を用いて欧州旅行に向かう内藤虎次郎を送別する漢詩も収められている。

(百年史編集委員会 磯波 護)

<保健コーナー>

体重の変動と健康

毎年春に行っている学生・教職員の定期健康診断では、身長・体重の測定が行われる。職員においてはその測定は任意ということになっているので、体重測定をパスする人が結構多い。ことに女性で何年間も体重測定を行っていないケースがある。また、簡易人間ドックだけを受けていて、定期健康診断を全く受診していない人も多い。選択した人間ドックのコースによっては「身体計測」がまったく行われていない。以前は定期健診を受けていないと人間ドックは受けられないという取り決めもあったようであるが、最近はあまりやかましく言っていない。

プレハブの健診場でもあり、屋外で長い間行列をして簡単な「身体計測」、「血圧測定」、「問診」では時間がもったいないという言い分である。尤もなことである。「血圧など家庭用の血圧計で毎日測っているし、それに健診の時には何時も高い値がでる」、「尿の色も変わりはないし…。でも最近少し尿の出の勢いが悪いかなあ。それに朝早くトイレに行くようになったのが気になる位かなあ」、「自分の健康のことは自分が一番よく分かっている」というような話を聞かないでもない。

しかし、「問診」は医療の基本あるいは原点であり、「問診」にはじまり「問診」に終わるといっても過言ではない。そして「問診」の時には、その人の顔色や身体全般のほか体重の増減にも注意をはらっている。極端な体重の減少は、ご本人がまず気づいているはずであるが、「問診」の時に気になることは遠慮なく質問してほしいものである。個人票に記載されている人間ドックの成績、特別定期健康診断の成績、検尿のデータ、胸部X線の所見などをすべて総合的に診断し、精

密検査が必要と判断すれば、呼び出しをかけて精査するようにしているので、たかが体重の変化と言うわけにもいかない。

昨年胸部X線で異常所見が発見され、体重測定でかなりの減量を認め、不幸にも肺ガンが見つかったケースがあった。このケースも、すぐに呼び出しを行っていたにもかかわらず、多忙という理由で受診までかなりの時間が経過していたのは残念であった。

肥満と成人病との間には、強い相関関係が認められることは誰もが知っている。すなわち、糖尿病、高脂血症、心臓疾患、脳血管障害などのリスクが高くなり、このような人が大量の飲酒、喫煙を続けると、寿命を縮める危険性がより高くなるという成績はたくさん報告されている。

体重の変動と寿命との関連で有名なのは、米国におけるフラミンガム調査である。男女5,127人を2年毎に、通算18年間にわたって追跡調査し、体重の変動係数と生命の予後との関連を調べた。その結果、体重変動の大きかった群で総死亡率、冠動脈疾患の罹病率、冠動脈疾患による死亡率が高かった。

ハーバード大学の男子卒業生、11,703人を27年間追跡調査した最近の米国におけるコホート研究がある。この研究では年齢、喫煙習慣、運動量を調整した多変量解析で、肥満度（この場合はBMI, Body Mass Index）と死亡率との間に相関を認めたとしている。このような疫学的研究は、いろいろな因子、ことに人種差、生活習慣、喫煙量、運動量、健康にたいする意識、対象とするグループの違い、統計処理などの違いによってさまざまな結果が得られる可能性があるが、このような研究は我が国ではほとんど行われていない。

いずれにせよ極端な痩せ、極度の肥満は健康には決してプラスとはならず、日常的に簡単に知る

ことができることでもあり、定期健診の時には進んで測定していただくようお願いしたい。

最後に、ハーバード大学のメイヤー教授による「亭主を早死にさせる十箇条」を紹介する。

- (1) 夫をうんと太らせる。
- (2) 夫に酒を勧め、砂糖や菓子をどんどん食べさせる。
- (3) いつもじっと座らせておく。

- (4) 油っこい食事をたくさん食べさせる。
- (5) 塩分の多い、塩辛い料理に慣れさせる。
- (6) 砂糖の入ったコーヒーをがぶ飲みさせる。
- (7) タバコをどんどん勧める。
- (8) 夜更かしをさせ、いつまでも寝かせない。
- (9) 休暇旅行に行かせない。
- (10) しょっちゅう文句を言っていじめる。

(保健管理センター 森下 玲児)

訃 報

渡邊庸一郎 名誉教授

本学名誉教授 渡邊庸一郎 先生は、平成6年12月25日逝去された。享年96。

先生は、大正12年東京帝国大学農学部を卒業、東京帝国大学助手、助教授を経て、昭和7年京都帝国大学助教授、同14年7月教授に就任、同36年停年により退官され、京都大学名誉教授の称号を受けられた。この間、昭和25年11月から同27年11月まで京都大学評議員、昭和34年12月から同36年8月まで農学部長、昭和35年2月から同年3月まで京都大学長事務代理を歴任され大学の管理運営に貢献された。

本学退官後は、広島農業短期大学学長、石川県立農業短期大学初代学長を歴任された。

先生のご専門は、農業経済学で農業政策の研究において数多くの研究業績を残された。

これら一連の学術上並びに大学管理・運営上の貢献により、昭和44年4月勲二等旭日重光章を受けられた。

ここに謹んで哀悼の意を表します。

(農学部)

宍戸圭一 名誉教授

本学名誉教授 宍戸圭一 先生は、1月3日逝去された。享年86。

先生は、昭和5年京都帝国大学工学部工業化学

科を卒業、同大学講師、助教授を経て昭和17年教授に就任、工学部工業化学第五講座を担当され、同46年停年により退官され、京都大学名誉教授の称号を受けられた。この間、昭和41年7月25日から同46年3月31日まで京都大学附属図書館長として大学の管理運営に貢献された。本学退官後は、岡山理科大学教授を務められた。

先生は有機工業化学、中でも有機合成化学及び有機反応化学に関する研究において数多くの優れた研究業績を残され、その発展に寄与されるとともに、精密有機合成化学の分野において多大の貢献をされた。

また、日本化学会、有機合成化学協会、近畿化学協会などにおいて、会長、副会長、支部長等の要職を歴任された。これら一連の研究教育活動、学界活動により、昭和54年4月勲三等旭日中綬章を受けられた。

ここに謹んで哀悼の意を表します。

(工学部)

日 誌

(1994年12月1日～12月31日)

- | | |
|-------|------------------------|
| 12月6日 | 評議会 |
| 〃 | 京都大学後援会助成事業検討委員会 |
| 14日 | 外国人教員及び留学生と本学関係者等との懇親会 |
| 20日 | 評議会 |
| 21日 | 国際交流委員会 |
| 〃 | 国際交流会館委員会 |
| 26日 | 放射性同位元素等管理委員会 |

